

『ソード・オラトリア』

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか外伝』 Vol.3
初回仕様版特典 オリジナルオーディオドラマ Vol.1

「悩み事から相談事まで

全てアミッドさんに打ち明けなさい、ガールズ！」

原案・大森藤ノ

脚本・白根秀樹

【登場キャラクター】

アミッド・テアサナーレ

リヴェリア・リヨス・アールヴ

アイズ・ヴァレンシュタイン

レフィーヤ・ウイリデイス

ティオナ・ヒリユテ

ティオネ・ヒリユテ

□ロキファミアリアのホーム・付近

少し戸惑った様子で、やってくるアミッド。

アミッド「(独り言)——リヴェリア様に呼び出されるままに、

ロキファミアリアのホームまで来てしまいましたけど……

いったいどんなご用なんでしょう？ もしや、ポーション

やエリクサーを値切る商談でしょうか？ それとも、また

ドロップアイテムを高値で売り込もうと……？

(気を取り直し) い、いいえ……リヴェリア様に限って、

そんなことはありません。ないはずですよ……おそらく……」

と、ホームから出てくるアイズ。

アイズ「(気づいて不思議そうに)……アミッド……？」

アミッド「あっ、こんにちはアイズさん」

アイズ「うちに、何か用……？」

アミッド「はい。リヴェリア様から、私に頼みたいことがあると。

アイズさんは、お出かけですか？」

アイズ「うん……ちよつと、散歩」

アミッド「そうですか。行ってらっしゃい」

アイズ「……ねえ、アミッド……？」

アミッド「なんですか？」

アイズ「……その……。……つまり……。

(言えずに)……なんでも、ない。それじゃ……」

立ち去るアイズ。

アミッド「あ、アイズさん？」

(ため息ついて)……明らかに、何かありそうな感じで立

ち去られましたも……」

□同・地下

カッソーンカッソーンと階段を下りてくるアミッド。

アミッド「……門番の方に言われて地下に降りてきましたが……。

いったい何があるというのでしょうか……？」

足音が止まる。

アミッド「……………ここは？ 懺悔室と書いてありますが……………」

ギイと扉を開くアミッド。

そこは懺悔室。仕切りで区切られ、相談者から相手（シスター）の顔が見えないようになってる造り。

アミッド「うわ、やけに薄暗いですね……………」

（奥へ声掛け）……………リヴェリア様、アミッドです。

お招きにより参りました……………」

リヴェリア「——ああ。よく来てくれたアミッド」

仕切りの向こうから現われるリヴェリア。

アミッド「リヴェリア様……………」

リヴェリア「わざわざすまない。ご苦労だったな」

アミッド「いえ。それより……………この部屋はいったいなんなんですか？

懺悔室、と書いてありましたが」

リヴェリア「ああ。他人に言えぬ罪を告白し、悔いるのが本来の役

割だが……………実質は、団員達の悩み相談の場だ。聞き手の顔

が見えない分、話しやすいらしい」

アミッド「なるほど」

リヴェリア「もともとはロキが遊び半分で用意したものだが、これが受けてしまったな。ファミリアが大所帯な分、普段口に

出来ない悩みや鬱憤も皆に溜まっているのだろう」

アミッド「そういうことでしたか」

リヴェリア「今日来てもらったのも、実はこの部屋に関係することだ。アミッド、お前に……………悩みの『聞き役』を頼みたい」

アミッド「（驚）私に……………ですか？」

リヴェリア「ああ。様々な選択肢を考えたが……………部外者とはいえ、

お前が一番信用できる。『ディアンケヒト・ファミリア』

の『戦場の聖女（デア・セイント）』……………治療師（ヒーラー）

として誰にでも平等に接するお前は、二つ名の通り聖女と

言うにふさわしい。団員の秘密が漏れる心配もない」

アミッド「(戸惑いつつ)それは、当然のことですが……」

リヴェリア「頼むアミッド。今日だけでいい。引き受けてほしい」

アミッド「……わかりました。私でよければお請けします」

リヴェリア「(安堵) ああ、助かる」

アミッド「ですが……普段、聞き役をしてらっしゃる方は、今日は来られないのですか？」

リヴェリア「(やや言い淀み)……実は……今日は外せない用があるんだが、いつもは私が務めている……」

アミッド「(驚) リヴェリア様が？」

リヴェリア「……最初はロキがやると言い張っていたのだが、任せれば悪用されることは目に見えているから……。仕方なしに、私が担当しているのだ。むろん、団員達には身分を隠してな……」

アミッド「……そうでしたか……。いくら顔が見えないとはいえ、よくバレませんでしたね」

リヴェリア「ああ、絶対に分からないように、声色を使っているからな。やむなくの措置だが――」。

(キャラ急変) 『キャハ！ 今日もばっちりみんなの悩みを聞いちゃうぞ☆！』

アミッド「(愕然) ツツ¹²」

リヴェリア「『さあ、迷える子羊ちゃん！ このプリティシスター☆アールヴちゃんにならんでも話しちやうんだぞツ☆！』」

(素に戻り) ……という具合だ」

アミッド「(言葉に詰まり) ……リ、リヴェリア様……」

リヴェリア「(暗く) 何も言うな、アミッド。組織が大きくなれば、それだけ人の闇も大きくならざるを得ない……」

アミッドのM『……リヴェリア様が、疲れ切った老人のような目をして……』

リヴェリア「(気を取り直し) ……まあ、お前なら無理に声を変えなくてもあるまい。そろそろ、一人目の相談者が来る頃だ。

最初のうちは私も同席する。安心してほしい」

アミッド「は、はい……。よろしく、お願いします……。」

と、どんとどんと部屋のドアがノックされる。

ティオナの声『（外から）こんにちはーっ！ ティオナとティオネ、悩み相談に来ましたあーっ！』

リヴェリア「早速お出ました。さあアミッド、こっちに来て仕切りの裏に入ってくれ」

アミッド「は、はいっ」

慌ただしく仕切りの裏に回るアミッド。

アミッド「ここに座ればいいですか？」

リヴェリア「ああ。まずは私が見本を見せよう……」

（声張って）『きゅぴるーん！ お待たせしちやっただ☆
最初の人、どうぞどうぞ！ キヤハ！』

アミッドのM『リヴェリア様、すごい……表情は一切変えていないのに、この爆上げハイテンション……』

ガチャッ。入り口のドアが開いて。

ティオナ「しつれいしまーす！ へえ、ここが懺悔室かあ」

ティオネ「なるほど、中はこうなってるのね。相談相手は仕切りの向こうにいて、お互いの姿は見えないと」

リヴェリア「『そういうことっ！ だから遠慮なく、このプリティシスター☆アルヴちゃんになんでも相談するんだぞ☆！
まず最初のお悩みは、なにかなッ？』

ティオナ「んー……悩みかあ。なんか流行ってるから来てみただけで、そこまで考えてなかったんだけどー……」

ティオネ「そうね。悩みなんて自分で解決するものだし」

ティオナ「うん。わざわざ人に相談するのもねー」

リヴェリア「（小声でイラッと）だったらすぐに帰れ……」

アミッド「（小声でなだめ）落ち着いて下さい、リヴェリア様っ」

リヴェリア「（一度深呼吸して）……『きゅぴるーん！ そんなこと
と言わずに、何か相談してよッ☆ シスター☆アルヴち

やんに、答えられない事なんてないんだぞっ☆!』」

ティオナ「そう言われてもなー……(思いつき)あ、そーだ!

胸って、どうしたらおつきくなるかなあ?」

リヴェリア「『なるほどなるほど』☆ それはたいへんだねっ☆』」
アミツドのM『(考えて)……胸、つまり乳房のお悩みですか。』

即効性のある方法はないですが、乳腺を成長させるために、
食生活を改善したり、姿勢を良くして正しく運動をしたり、
といった回答が考えられます。ですがリヴェリア様なら、
もっと的確な答えをお持ちかも……!』

リヴェリア「『キャハ! 胸の事なら、いいおまじないがあるよ!』」

アミツドのM『(意外な答えに)……え……おまじない!』

リヴェリア「『一日三回、南の空に向かって牛乳を飲みながら『イ

タリナイタリナ・プッカE』って唱えるの☆! たったこ

れだけで、すぐにぼいんぼいんのぼいんばいんダヨっ☆!』」

ティオナ「ホントに…… チョー簡単じゃん!」

リヴェリア「『でしょでしょ☆ このプリティシスター☆アールヴ

ちゃんにかかれば、どんな悩みもバツチリかいけつ——』」

アミツド「(思わず)だ、だめですよ、そんな迷信みたいな方法っ!」

ティオナ「(声に驚き)あれ……今の声、誰!」

ティオネ「シスターって、二人いるの!」

リヴェリア「(小声)いま声を出すヤツがあるか、アミツド」

アミツド「(小声)す、すみません、私、つい……!」

リヴェリア「(小声)相談者は、必ずしも正しい答えを求めている
わけではない。難しい知識を並べるより、気持ち明るく
させることが大切なのだ」

(続く)

※オーディオドラマ Vol.1ではこのまでのシナリオおよびこの続きが、
音声でお楽しみ頂けます。